

「生物多様性向上農業拡大事業」  
生きものと地域を育む農業セミナー 話題提供

**農業を通じた食料生産と生物多様性保全**  
～その現状と課題～



平成23年2月21日  
株式会社アミタ 持続可能経済研究所  
本多 清

株式会社アミタ 持続可能経済研究所 (c) 2011 AMITA Institute for Sustainable Economies Co., Ltd.

**1. 生物多様性向上農業拡大事業**  
事業紹介



株式会社アミタ 持続可能経済研究所 (c) 2011 AMITA Institute for Sustainable Economies Co., Ltd.

**話題提供の内容**

1. 生物多様性向上農業拡大事業 事業紹介
2. 農業を通じた食料生産と生物多様性保全  
(生きものと地域を育む農業)  
～ 取り組みの現状と課題 ～
3. 取り組みの今後の進展に向けて

株式会社アミタ 持続可能経済研究所 (c) 2011 AMITA Institute for Sustainable Economies Co., Ltd.

**生物多様性向上農業拡大事業 事業紹介**

(※平成22年度 農林水産省補助事業)

- 目的
  - 農業を通じた食料生産と生物多様性保全を両立しようとする取り組み  
(「生きものと地域を育む農業」)の推進を目的に、取り組み事例の調査や、  
各種コミュニケーション活動を実施
- 実施事項
  - 事例調査(アンケート、インタビュー など)
  - セミナーの開催(宮城、滋賀、東京)
  - ガイドブックの作成
  - 情報交換ボードの設置・運営



詳細は、テキスト48ページ参照

[http://www.aise.jp/bd\\_agri/](http://www.aise.jp/bd_agri/)

株式会社アミタ 持続可能経済研究所 (c) 2011 AMITA Institute for Sustainable Economies Co., Ltd.

5



## 2. 農業を通じた食料生産と生物多様性保全 (生きものと地域を育む農業)

～ 取り組みの現状と課題 ～



株式会社アミタ持続可能経済研究所 (c) 2011 AMITA Institute for Sustainable Economies Co. Ltd.

7

### 取り組みの背景・経緯

■ 主な関連法・施策の整備状況

- 平成 4年 気候変動枠組条約、生物多様性条約(地球サミット)
- 平成18年 有機農業の推進に関する法律
- 平成19年 農地・水・環境保全向上対策
- 平成20年 農林水産省「農林水産省生物多様性戦略」、生物多様性保全基本法
- 平成20年 農林水産省生物多様性戦略検討会  
「生物多様性を重視した持続可能な農林水産業の維持・発展に向けて -生きもの認証マーク活用への提言-」
- 平成21年 農林水産省生物多様性戦略検討会  
「農林水産分野における生物多様性戦略の強化  
～ 生きものへの真摯なまなざしをとりもどそう～」
- 平成23年 環境保全型農業直接支援対策(実施予定)

取り組みに対する関心の高まりと推進策の整備が進みつつある状況

株式会社アミタ持続可能経済研究所 (c) 2011 AMITA Institute for Sustainable Economies Co. Ltd.

6

### 取り組みの背景・経緯

- 農業は、生物多様性(自然の恵み<sup>あい</sup>)に依存して成り立っている産業です
- しかし、過度の圃場整備や農薬使用、過疎高齢化、外来生物の侵入などによって、自然の恵みが失われる場合もあります

▼

- そのような中、農業活動を通じて、里地里山などの生きものが暮らす自然環境を育み、それらを多様な関係者と共有することで、農業経営の改善や地域づくりを行おうとする取り組みが各地で進んできています

**〔「生きものマーク※」という考え方も提唱〕**

※生物多様性に配慮した農業を行い、産物などを介して関係者とのコミュニケーションを行う取り組み





株式会社アミタ持続可能経済研究所 (c) 2011 AMITA Institute for Sustainable Economies Co. Ltd.

8

### 取り組み事例



http://www.aise.jp/bd\_agri/business/business.pdf

- 全体的な傾向
  - 畑作や果樹に比べると、水田で取り組みが先行
  - 取り組み規模は様々(1人～数百名迄)
  - シンボリックな生きものを設定しているケースとあえて行わないケースの双方が存在
  - 高付加価値型の販売や環境教育との連携を行っているケースも
- 課題
  - 生産や保全、販売、関係者とのコミュニケーションなどの面で課題が見られる

- 生産・保全面
  - 農法や保全策の改善(収量低下、労力増加への対応)、効果検証 など
- 販売面
  - 販路開拓、ブランド管理の実施 など
- コミュニケーション面
  - 情報発信(地域内外)、支持・共感者の獲得 など

詳細は、テキスト49ページ参照

株式会社アミタ持続可能経済研究所 (c) 2011 AMITA Institute for Sustainable Economies Co. Ltd.

## 取り組み事例 9

**9 宮城県大崎市**  
Oshiki city (Miyagi)

**ふゆみずたんぼ米**  
fuyumizu-tanbo rice

\*カンの越冬地の沼地周辺のたんぼで冬期湛水  
winter flooding in rice field around wintering area of wild goose



**23 新潟県佐渡市**  
Sado city (Niigata)

**朱鷺と暮らす郷づくり**  
swan and living community

\*生きものを農法の採用(冬期湛水等)  
development of life-friendly method (ex. winter flooding)

\*認証米の販売  
sales of certified life-friendly rice



**8 田尻地域 田んぼの生きもの調査プロジェクト**  
Tanishira region paddy field life survey project

\*農協(JA)と生協が連携、「生きもの認証マーク」の活用も  
cooperation between farmers and consumers, utilization of Amami certification mark



**25 滋賀県高島市**  
Takashima city (Shiga)

**たかしま生きもの田んぼプロジェクト**  
Takashima life-friendly paddy field project

\*自慢の生きもの設定  
setting own symbol organism by each farmer

\*各種生きもの共生策の実施(魚道、スロープ等)  
implementation of co-existing measures: fish-bank, buffer slope



株式会社アミタ持続可能経済研究所 (c) 2011 AMITA Institute for Sustainable Economies Co., Ltd.

## 保全活動の例 11

- 水田農業
  - 冬期湛水で水鳥に生息地を提供する
  - 魚道や小動物用スロープを設置する
  - 中干しを梅雨明けまで延期する
  - 田んぼの中にビオトープや水路を設置するなど
- 畑作農業
  - 周辺環境由来の資材を肥料に活用する
  - 地域に土着する天敵を害虫対策に活用する
  - 外来生物に代えて在来の受粉ハチを活用するなど



冬期湛水の例



魚道とスロープの例



野草堆肥



ビオトープの例

株式会社アミタ持続可能経済研究所 (c) 2011 AMITA Institute for Sustainable Economies Co., Ltd.

## 取り組み事例 10

**32 熊本県阿蘇地域**  
Aso area (Kumamoto)

**阿蘇草原再生シール**  
asosokubara saishu seeru

\*ススキなどで野草堆肥を生産し、野菜作りに利用  
conservation of mowing custom to produce green manure, utilization of green manure for vegetable production



**29 徳島県鳴門市**  
Naruto city (Tokushima)

**えんたのれんこん**  
enta no renkon

\*ハス田周辺の生きものたちの保全  
conservation of various organisms inhabiting around lotus root pond



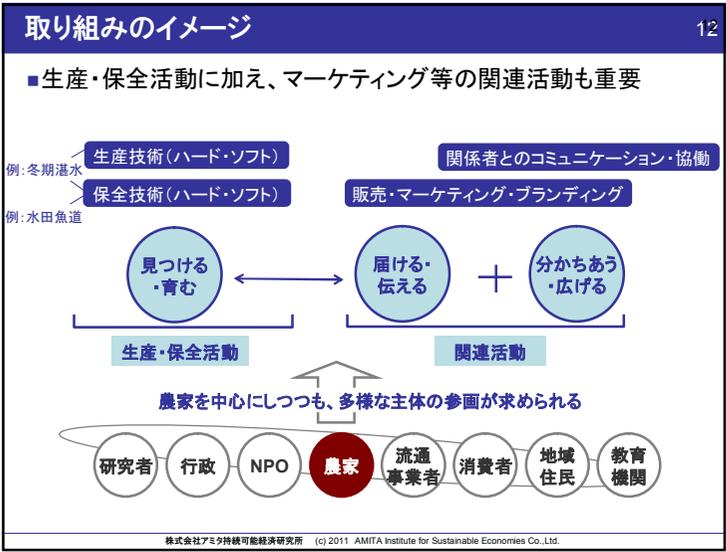
**12 茨城県霞ヶ浦周辺**  
surrounding area of Lake Kasumigaura (Ibaraki)

**湖がよるこぶ野菜たち**  
umigayoru kobu yasaitachi

\*外来魚や未利用魚を魚粉加工し肥料として利用  
producing fish meal from alien fish and unused fish, utilization of fish meal for vegetable production



株式会社アミタ持続可能経済研究所 (c) 2011 AMITA Institute for Sustainable Economies Co., Ltd.



## 先進・先行事例の特徴

13

- 活動のコンセプトが明確、さらにターゲットや共感を呼ぶ要素(物語・メッセージ)が特定されている

マーケティング

- 生産者が多様な主体(技術指導者、行政、流通事業者、消費者、地域住民、NPO、研究者等)と連携し、双方向性のコミュニケーションがとられている。認証制度の活用も

情報発信・コミュニケーション

- プロデューサー(仕掛け人)、コーディネーター、ディレクター・事務局の存在がある

戦略づくり・組織化

- 環境・生物多様性への配慮のみならず、産物・サービスの構成要素の質が高い(例:食味、鮮度保持等)

生産・流通技術

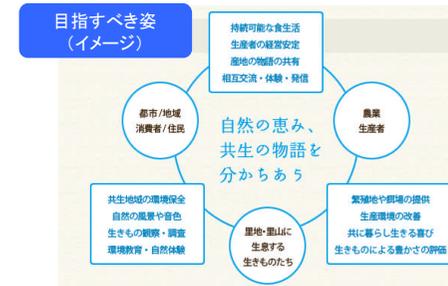
※ただし、取り組みの進展に伴い、取り組みや制度の硬直化や複雑化に陥るケースも

株式会社アミタ持続可能経済研究所 (c) 2011 AMITA Institute for Sustainable Economies Co., Ltd.

## 目指すべき姿

15

- 農業は自然の恩恵を受ける一方で、農業活動を通じて、里地や里山など、多くの生きものが暮らす自然環境を創り出しています
- 農業者、自然(生物多様性)、消費者の3者が互いに関係を深めていくことが必要です



株式会社アミタ持続可能経済研究所 (c) 2011 AMITA Institute for Sustainable Economies Co., Ltd.

## 3. 取り組みの今後の進展に向けて

14



### 3. 取り組みの今後の進展に向けて



株式会社アミタ持続可能経済研究所 (c) 2011 AMITA Institute for Sustainable Economies Co., Ltd.

## 目指すべき姿

16

- たかしま生きものたんぼプロジェクト(滋賀県高島市)の場合



※近江商人の「三方よし(売り手よし、買い手よし、世間よし)」の精神をもとに考案(どれかが欠けても長くは続かない)。

株式会社アミタ持続可能経済研究所 (c) 2011 AMITA Institute for Sustainable Economies Co., Ltd.

## 取り組みを進めるための「3つのステップ」

17

### ■ Step1 見つける・育む

- 対象とする生きものや環境の設定
- 生きものや産物へのまなごしの向け方、育み方



### ■ Step2 届ける・伝える

- 栽培・出荷基準づくり、品質の担保
- ブランドづくり、物語づくり
- 情報発信、販路開拓
- 消費者、流通事業者などとのコミュニケーション



### ■ Step3 分かちあう・広げる

- 農業者のなかま
- 行政、専門家
- 地域(学校、住民)
- 流通事業者、消費者(グループ) など



株式会社アミタ持続可能経済研究所 (c) 2011 AMITA Institute for Sustainable Economies Co., Ltd.

## まとめ

19

- 食料生産と生物多様性保全に取り組む地域や農家は少しずつ増えてきていますが、生産面、保全面、販売面などで課題も見られます



- 地域の良さを活かす独自のストーリーを育み・分かち合う、という考えをもつことが重要です



- 小さな失敗をおそれず、みんなで楽しみながら技術を高め、つながりをはぐくみ、取り組みを進展させましょう



実際に取り組まれている方々から、その内容をご紹介します

株式会社アミタ持続可能経済研究所 (c) 2011 AMITA Institute for Sustainable Economies Co., Ltd.

## 取り組む上での心構え

18

### ■ 農業・農村らしさも忘れず、大事にしましょう

- 1. あるものさがし
  - 地域資源(地域にあるもの)を活用すること、無いものねだりをしないこと
- 2. つながりづくり
  - とりわけ地域内の産業間の連携や顧客との関係づくりを重視する
- 3. わかちあい
  - 住民が参加し、利益が住民に還元される仕組みをつくる
- 4. みえる化
  - 環境面や社会面での効果を確かなものとし、関係者や顧客に伝える
- 5. ほどほど
  - 適正なサイズやスピードで行うこと、過剰な需要に振り回されない
- 6. まなび
  - 関係主体が取組みに参加することで学び、成長する仕組みをつくる
- 7. つづける
  - 小さな失敗をおそれず試行錯誤を(計画・実践・評価・改善の継続を)

社団法人日本森林技術協会(2010)「山村再生」研修テキスト」を参考に作成。

株式会社アミタ持続可能経済研究所 (c) 2011 AMITA Institute for Sustainable Economies Co., Ltd.

ご静聴ありがとうございました

株式会社アミタ持続可能経済研究所 (c) 2011 AMITA Institute for Sustainable Economies Co., Ltd.